

宮沢賢治と社会主義運動

——「労農党」を中心に——

坂井健

はじめに

- 一、労農党と労農派
- 二、労働農民党の成立と変遷
- 三、初期労働農民党の性格
- 四、無産農民学校の問題
- 五、労働農民党の左傾化と賢治
おわりに

(要旨)

羅須地人協会当時の賢治が社会主義的な思想に接近していたことは、すでに指摘されている。特に、労農党との関わりは、賢治の詩に読まれていることもあって早くから指摘されているが、論の前提として労農党がどのような政党であるかの確認がなされていないために、労農党すなわちマルクス主義であるかのような理解で論じられたり、労働農民党の性格が成立期とその後とで変化していることも無視されて論じられたりなど、混乱している。本稿では、羅須地人協会設立当時の労働農民党の性格を明らかにする作業を通して、当時の社会主義運動の中で羅須地人協会の活動を位置づけ、賢治の思想のあり様を明らかにして行く。

はじめに

羅須地人協会当時（大正一五年（昭和三年））の賢治が社会主義的な思想に接近していたことは、すでに指摘されている。はやくから、名須川澄男氏は、かつての労農党員からの聞き取りをもとに、賢治が労農党の事務所の保証人となったり、経済的援助を行っていた事実を挙げ、賢治の社会問題に対する意識の高さを指摘している。^① これを受けて、青江舜三郎氏は、「賢治は羅須地人協会時代において、まぎれもなく労農派のシンパであり、協会はその運動実践のためのものであった。」と述べ、もっぱら法華経の行者であるとして、政治活動から切り放して理解されていた、それまでの賢治像を覆している。^②

最近では、杉浦静氏が、賢治が労農党には共感を持っていたという大筋は肯定しながらも、マルクス主義や革命には、否定的であったと述べ、労農党の掲げる要求には同感しつつも労農党の理想の実現のプロセス、即ち社会変革の方法については違った考え方を持っていたとの見方を示している。^③

一方、羅須地人協会の実践綱要ともいべき『農民芸術概論綱要』についても、イギリスの社会主義者ウイリアム・モリスの影響が見られることが指摘されており、当時の賢

治が社会主義的な思想に傾倒していたこと、ここまでは間違いない。

けれども、社会主義といっても、非常に意味が広い。賢治の抱いていたその社会主義的な思想がどのようなものであるのかというと、どうもはっきりイメージできないのである。これは一つには、「労農党」とか「労農派」とかある。これは一つには、「労農党」とか「労農派」とかある。これは一つには、「労農党」とか「労農派」とかある。持っ思想が不明瞭であることによるだろう。名須川氏は、周知のこととして定義せずに論じているし、名須川氏の論を受けた杉浦氏は、労農党即ちマルクス主義を奉じているかのような言い方をしている。しかも、「労農党」すわなち労働農民党は、成立時とその後とは性格が違っているのに、そのことにも触れられていない。青江氏は、「労農党」の他に「労農派」という言葉も使っている。

本稿では、当時の社会主義運動のありようを検証する作業を通じて、羅須地人協会の活動位置づけ、賢治の抱いていた社会主義的な思想がどのようなものであったのかを浮き彫りにして行きたい。

一、労農党と労農派

名須川氏・杉浦氏は、「労農党」という語を使っているが、青江氏は「労農派」という語を使っている。これについて青江氏は次のように述べている。長くなるが、後々関

わってくるので引用する。

くわしいことはその方面の文献を見てもらわなければならぬが、私としていいたいのは、明治中期の日本文学の流れの中に悲惨小説派というのがあったということだ。フランス十九世紀の文豪ヴィクトル・ユーゴの『此悲惨』という、社会機構及び政治の欠陥による下層生活者の悲惨を描いた小説に刺激されたひとたちが、同じ視角にたつてわが国のそうした面を描くことになる。作家と書かず、ひとたちとしたのは、中には堺枯川、綱島梁川、内村鑑三、賀川豊彦などの当時有名だったキリスト者とともに、堺枯川、荒畑寒村などという社会主義者がまじっていたからだ。キリスト者たちはやがてふたたび伝導布教の世界に戻って行くのだが、それよりは現実の世界で民衆の悲惨を救うべきだと、文学を捨てて平民社をつくり、実践運動に入ったのは、堺枯川、荒畑寒村、山川均たちであった。

これらのひとの組織づくりは、東大系福本イズムの系脈を引く当時の共産党のように、錯雑した修辭法で相手を一方的にむりやりに仲間に引き込む（その点では日蓮宗の折伏によく似ている）というものでなく、

その根底には人道主義的正義感があって、メンバーはほとんどあたたくしんみな感じが濃い。

そのころこの労農派のほかに日本労農党というのがあり、これは共産党と同じ根だが合法活動の仮面としてその名が用いられた。これはしばしば労農派と混同されるが、東北の農民運動は労農派系で、だからこそそれは比較的すなおに地方の農民に受け入れられたし、賢治もその傘の下で、おのれをとことん燃焼させる決心をしたのではなかったか。

内容的に問題のある点もいくつかあるが、要するに、氏の言うところは、「労農派」はキリスト教的人道主義の社会主義者で、「日本労農党」は共産党系であるということだろう。

つまり、賢治は、共産主義には否定的であったが、キリスト教的人道主義の社会主義者たちに共感していたというわけで、そのかぎりでは一応話は分かるのだが、青木氏が論拠としている名須川氏の報告は「労農党」であり、また、よく引かれる賢治のノートに記された詩の草稿の一節「きみたちがみんな労農党になつてから／それからほんとのおれの仕事が始まるのだ」「黒つちからたつ」昭和二年三月二六日）にも「労農党」とある。

これについて、青江氏は「この初期労農党は実質的に多分に労農派であった。このへんの分裂や合体のややこしさは専門書を見てもらわなければならない。」と説明しているが、よく分らない。

労農派は、前衛党の結成とその指導による革命を主張する福本イズムが共産党の主導権を握ったのを嫌って、分れた山川均等が、昭和二年一二月、雑誌『労農』によって社会民主主義の政治経済理論を展開させた一派である。後述する労働農民党（労農党）は、前衛党を否定し、労働者・農民の単一無産政党の結成を説いた山川イズムの指導によって大正一五年に生まれたもので、両者の関係は深いが、とりあえず別モノである。

また、青江氏は「日本労農党」は、共産党と同じ根であると述べているが、日本労農党は、労働農民党から左派を嫌って分裂した一団により出来たもので、杉山元治郎が中心となって作った中間派的な政党であり、共産党とはむしろ対立する立場である。しかも、成立したのは昭和元年一二月である。大正一五年の羅須地人協会創立時には存在していない。また略称は「日労党」である。

さらに、青江氏のいう「初期」というのがいつごろまでのかがはっきりしない。羅須地人協会活動時に存在し、賢治との関わりについての証言のある「労農党」と呼ばれ

る政党は、大正十五年（昭和元年）に成立し、昭和三年三月に共産主義的であるとして解散させられた労働農民党だけである。（大山郁夫・河上肇らが再度結成した労働農民党は昭和四年一月の成立）

名須川氏の報告によれば、賢治は、花巻における労農党支部（稗和支部）の成立から解散時まで関わっていたという。羅須地人協会の成立も大正十五年で、活動の停止が昭和三年三月である。（この時期の符合は意味があると思う。）したがって、仮に「労農党」が初期と後期で性質が違っていたにせよ、それは大正一五年（昭和元年）成立の労働農民党についてのことではなければならないし、それも昭和三年三月までの間で考えなければならない。

ともあれ、この頃の賢治の思想と、羅須地人協会の性格を知るためには、当時の農民運動・労働運動について知っておく必要があるようだ。

二、労働農民党の成立と変遷

大正十四年、治安維持法の成立と引き換えに初の普通選挙が行なわれることとなった。いわゆるアメとムチの政策である。

この巧みな政策によって、かつての大杉栄等を中心とする組合運動とストライキによる闘争運動（アナルコ・サン

ディカリズム)の統一は破れ、運動は分裂して行くことになる。

議会政治による闘争を認めないアナキズム派は、当然普通選挙に反対し、前衛党の指揮による革命を目指すボルシェビキ派(いわゆるマルクス・レーニン主義。当時の共産党にあたる。)も、普通選挙は、労働者に議会政治による社会改革の幻想を与えるまやかしであるとして批判した。

一方、合法的な政治活動・議会政治によって改良主義的に社会を変えて行こうとする穏和な組合は、全国的な無産政党を組織し、議会に代表者を送り込むことで無産階級の利益を守ろうとした。

こうした一派は、政府に危険団体視されることを恐れたためであろうが、自分たちの仲間に過激派が含まれることを嫌った。そのため左右両派の対立が激しくなり、大正十四年三月、治安維持法が審議されている折り、日本労働総同盟右派の鈴木文治らは左派の追い出しをはかり、二十五組合を除名してしまった。

この左派は日本労働組合評議会を組織することになるが、この両派の対立は後々まで続くことになる。

以上は、当時の労働運動・農民運動の大まかな流れであるが、ここでは当時の総合雑誌『太陽』(大正一四年九月)所載の「無産政党組織準備委員会主要団体及中心人物」と

いう記事を参考に当時の事情を詳しく探ってみたい。以下は、記事の内容を論者がまとめたものである。

「無産政党組織準備委員会」は、山川イズムの影響下にあった日本農民組合の呼びかけによって作られたものである。無産党の結成については次期尚早論や、政党政治を認めないアナキズム系の組合の反対もあったが、日本農民組合の呼びかけに応じて、日本労働組合評議会、日本労働総同盟、官業労働総同盟、政治研究会など十六団体の組合幹部が参加し、八月十日、ブルジョアに対抗し、無産階級の利益と幸福を守るための無産政党を樹立するべく設立準備の声明書が採択された。

しかし、ここに大きな問題があった。それは何かというと、日本労働総同盟(以下総同盟)と総同盟から五月に分裂独立した日本労働組合評議会(以下評議会)との対立である。結局、決裂を防ぐためにこの日は、政治・政党のあり方についての根源的な双方の対立を棚上げする形で問題を先送りし、とにかくも設立へ向けて進む大筋において合意することとした。

このような準備委員会の現状の紹介の後、記事は各団体の説明に入るが、その中で、「評議会」については次のように説明している。

(小史) 本年五月まで日本労働総同盟に所属してゐたことは言ふまでもない。(中略) これら一派は、総同盟幹部の行動をあきたらずとし、新たに日本労働組合評議會を組織するに至つたのである。此の組合は思想的系統の極めて濃厚な組合(第三インタナショナル?)で従つて総同盟の如く多少穩健なる行動を生温しとして、極めて明瞭なる主義の下に激しい闘争的意識を表示している。

評議會はその共產主義(マルクス・レーニン主義)的性格から、過激な戦闘意識を持ち、微温的な総同盟から分離・独立したばかりであつたとされている。注7の『昭和史(新版)』によれば、左派が追い出されたことになつてゐるが、それはともかくも、当然、双方には埋めがたい対立があつた。

記事は、この準備委員会に参加した各団体の紹介の後、総同盟と評議會の対立についての解説に入る。次は「総同盟と評議會の衝突」という見出しの記事である。

次に総同盟と評議會との根本的意見の相違とは何か? 既に世人の知れる如く評議會と総同盟の因が階級的指導精神の共產的であるや否やの問題にあつた如

く、此の度の政党組織の上にも両派の意見は相衝突免れぬのである。総同盟側は近時或る方面の避難的となれるが如く、稍々もすると微温的で有り妥協的である。総同盟側は、労働組合の勢力の未だ十分ならざる時に當つては時に多少の隱忍自重をせねばならず、時に意に満たぬ妥協もせねばならぬ、非常手段を廢して飽く迄合法的に進むのが結局勝利の近道で有ると云ひ、之れに反して評議會側は飽く迄主張と行動とを公表し、一切の妥協を廢して階級的指導精神を確守しようとする飽く迄急進的である。(中略)「我々の政党は議會を目標としての選挙本意の団体でなく政治的日常闘争の本意の団体でなければならぬ」これが評議會側の主張であるが、要するに全然議會政治を認めざるもの、同時に日常闘争本意とは暗に時あつてか非常手段を意味するものであらう。

総同盟はあくまで合法的に、議會制にのつとつて漸進的に改革を進めて行こうとするのに対し、評議會側は、議會制に固執せず、主張と行動とを一致させ、妥協を廢して進めて行こうとし、非常手段をも辞せぬとの考え方を持つてゐるとされている。

このような穩健派急進派の対立の挙げ句、総同盟は設立

準備委員会から脱退してしまう。産婆役の日本農民組合は、両者の対立の間で苦慮するが、評議会は総同盟の再加盟まで自発的に脱退し、他の団体に所属するメンバーで構成されている政治研究会は解散する（準備委員会は、一団体一票を原則としたので、当該するメンバーが重複していなくとも、ひとつの団体に所属する構成員が別に団体を作れば、結果として、その団体の発言力が不当に増すことになる。）という条件で、大正十四年一月、日本初の無産政党、農民労働党がともかくにも杉山元治郎日本農民組合長の司会のもとで発足することとなった。

しかしながら、共産主義的であるなどの理由で、結党後、わずか三時間後に解散を命じられる。

このように農民労働党は成立直後に解散させられてしまふが、杉山らは屈せず、翌大正十五年三月、労働農民党を結党する。労働農民党は、党結成までは評議会など急進的な団体は排除され、穏健派のみの構成であつて、合法的な政治活動を約束していたが、結党後の門戸解放が決議されていた。これは評議会などの加盟をめぐる迷惑の対立の結果の玉石的決着であつただろう。

つまり、評議会を排除したくはないとする思いと、評議会を構成団体に含めるならば、先の農民労働党と同様に共産主義的であると認定され、解散させられてしまふとの思

いである。

しかし、この門戸解放の原則は、結果として、労働農民党の分裂と変質とを招いた。成立してまもない大正一五年一〇月、左派の評議会などが入党するや、これを嫌つた穏健派は労働農民党を脱退し、社会民主党や前述した日本労働党に分裂することになった。一二月には、産婆役たる穏健派の杉山は執行委員長を辞任し、急進的な大山郁夫が委員長となり、労働党は最左翼の無産政党となった。昭和三年二月の総選挙では、代議士二名を当選させるなど、党勢は振るつたが、その後まもない四月、共産党に関係が深いとの理由で解散させられる。

このように労働農民党は、創立時と解散時とは性格が異なっている。青木氏のいっていることは、個別具体的には間違いがあるが、この点では正しい。かつ、賢治はその創立時から解散時まで、労働農民党のシンパであつたのだ。

三、初期労働農民党の性格

以上述べてきたように、労働農民党は、農民労働党の後身であり、その産婆役は日本農民組合であつた。その日本農民組合の性格について、先の『太陽』の記事を参考に見て行きたいと思う。

日本農民組合（大正十二年創立）は、当時最大の農民団

体で、中心人物として杉山元治郎、賀川豊彦などの名が挙げられている。「宣言」は次のようである。

農は国の基であり、農民は国の宝である。日本は未だ農業国である。国民の七割は田園に居住し、又その七割は小作人である。然るに積年の陋弊は田園に充ち、土地兼併の悪風は漸く現われ、田園も遂に資本主義の侵略するところとなり、小作人は苦しみ日雇人は歎く、茲に我ら農民は互助と友愛の精神を以て解放の途上に立つ。

我等は飽迄暴力を否定す。我等は思想の自由を社会の大道に従ひ、真理を愛し、妥協なき解放を期せねばならぬ。即ち我等はたゞ農民の団結による合理的生産者組合により資本家に対抗するより外に道を持たないのである。

我等は急いではならぬ。土地の社会化も産業の自由も一瞬にして成るものではない。春蒔く種は秋まで待たねばならぬ。(以下略)

日本は農業国であるとの認識が示され、資本主義によって農村が疲弊しているとの認識は示されるものの、それに対抗する手段は、互助的な組合であり、その方針は合法的

漸進的な穏和な改良主義である。ここには、都市に流入した困窮した労働者を前衛党が指揮して、暴力行為も辞さずに、プロレタリア革命を成し遂げようとするマルクス・レーニン主義のかけらも見られない。

中心的人物の杉山元二郎・賀川豊彦は共に牧師から社会運動・農民運動に身を投じて、民衆を救おうとした人であり、キリスト教的人道主義の立場にあった人物といつてよい。

法華經の行者として農民を救おうとした賢治との類似性を感じられようが、日本農民組合には次のような「綱領」がある。

- 一、我等農民は知識を養ひ技術を研ぎ徳性を涵養し農村生活を享樂し農村文化の完成を期す。
- 二、我等は相愛扶助の力により相伊し相寄り農村生活の向上を期す。
- 三、我等農民は穩健着実理合法なる方法を以て共同の理想に到達せんことを期す。

これなどは、芸術に重きを置いた賢治の『農民芸術概論綱要』とは若干性質が違うけれども、羅須地人協会の綱領としても、立派に通用するようなものであろう。

このように、温和な性格の組合であったが、綱領に次いで、一から二一までの「主張」が掲げられて、そのうち、一、耕地の社会化。六、普通選挙。七、治安警察法の廃止などは、保守的な地主層に大きな脅威を与えたというし、後に述べるように、なかなかの反資本主義的な活動ぶりであった。

それはともあれ、この「主張」の中には、一〇、農民学校の普及。一八、農民芸術の発達。一九、理想的農村の設立。二〇、農民科学の確立。二一、農民生活の享楽。といった項目も含まれていて、ここにも羅須地人協会との類似性が認められる。

このような日本農民組合の性格は、農民労働党及び初期労働農民党（労農党）に受け継がれていっただろうし（いづれも、杉山元治郎・賀川豊彦が中心人物）、賢治の羅須地人協会の活動も、このような農民運動の流れの中で捉えて行くのが自然である。

四、無産農民学校の問題

大正十五年の旧盆十六日賢治は羅須地人協会を設立するが、その春から、新潟県では日本農民組合の農民学校問題が持ち上がっていた。

これは、この春、新潟県の木崎村で起こった大規模な労

働争議に伴ったものであった。木崎村の労働争議は、大正十一年頃からの小作米軽減運動に端を発するものであるが、日本農民組合関東連盟（日本農民組合所屬）の勢力が新潟地方に入ったのち、運動はますますさかんとまって、地主・小作人の間で訴訟がおこるに至り、一四年五月五日、ついに二十八名の組合員が公務執行妨害などの罪で、起訴・収容されてしまう。これにともなう、小作人組合員の学校児童四百数十名が五月十五日から同盟休校を行ない、別に独自に無産農民学校を設立して、そこで授業を行なっていたものだが、政府はこれを認めず、閉鎖を命じた。

同日の記事には、農民組合にはさらに高等農民学校を設置し、「農業技術、経済学、農民組合の理論と実践等」についての教育を施そうとする予定である旨の記述がある。

こうしたさなかに、勤めていた花巻農学校を辞め、独自に羅須地人協会を設立した賢治が、農事や芸術文化を行なおうとしたのである。これでは、日本農民組合および労働農民党と賢治が無関係だと考える方が不自然であろう。

事実、賢治には次のような「禁治産」という戯曲のメモがある。時期ははっきりとは特定できないが、この頃のものであろう。

長男空想的に農村を救はんとして奉職せる農学校を

退き村にて掘立小屋を作り開墾に従ふ／借財によりて
労農芸術学校を建てんといふ。／父と争ふ、互いに下
かず 子つひに去る。

長男には賢治自身を、父には賢治の父政治郎をそれぞれ
当てることができるだろう。なお、「芸術学校」と
あるが、杉山芳松あて書簡（大正一四年四月一三日）に
「小さな農民劇団」をやりたいとあるように、農民演劇を
も含むものであった。時代は少し遡るが、亀戸事件で惨殺
された労働組合運動のリーダーである平沢計七も、労働運
動の一環として労働劇団を結成しており、当時の社会運動
の中で演劇は大きな位置を占めていたようである。賢治も
同様に演劇を重要視していた。

このように状況的に見ても、賢治の意識の上でも、羅須
地人協会設立当時、賢治は労働農民党のシンパであり、協
会はその運動実践のためのものであったということができ
る。

前述したように、労働農民党はあくまで合法的な活動を
建前とした。組合による団結と無産政党とによって自分た
ちを守ろうとしたのである。その点、政党政治・議会政治
を認めないアナルコ・サンディカリズムとも違ふし、前衛
党によって労働者を指揮して、革命を起こし、現政府にとっ

て変わらうというマルクス・レーニン主義ともまったく違っ
ていた。

要するに、当時の賢治は、農民組合を作って自分たちの
権利を守るといふサンディカリズムの立場をとっていたの
である。組合を組織し、無産政党を組織し、議会政治にのっ
とって合法的に農民を救済しようとする、社会民主主義的・
改良主義的・社会主義的立場であったし、それで社会は改良
できると考えていた、とすることができよう。

五、労働農民党の左傾化と賢治

このように初期の労働農民党は、政治的な要求について
も、社会改良の方法についても、賢治と共通していたと考
えられるが、次に、この後の労働農民党の変質が賢治に影
響を与えているのかどうかについて問題にしてみたい。

杉浦氏は、賢治の知人の回想をもとに、昭和二、三年ご
ろの賢治についても、マルキシズムや革命に否定的であつ
たと結論づけているが、はたしてどうであらうか。

前にも述べたように、大山郁夫が委員長となつてからの
労働農民党は評議会系が強くなっており、共産党との関係
があるとして解散させられた政党なのである。それにもか
かわらず、賢治は解散までシンパであり続けたのだ。

杉浦氏の引いている賢治の言葉についての複数の聞き書

きは、内容も共通しており、信憑性は高いだろう。だが、それは回想者が正しい回想をしているという意味の信憑性なのであって、必ずしも賢治の考えがそうであつてことを意味しない。いったい当時のような状況にあつて、教師（学校を辞職はしていたが）ともあるう立場の人間が、マルクス主義や革命への支持を他人に向かって公言するものだろうか。

賢治の戯曲メモに次のようなものがある。

象徴的ファンタジー／革命

第一場

前方デ火盛ニ燃エル

六名長髪等ノ青年繩ラレテ座ス、兵士一〇、少尉A命
令ス、兵士コレヲ突殺ス

第二場

或ル高格神社ノ拜殿、柱、格子扉、鏡、等

労働服ト寶石トヲ着ケタル青年神前ニ額イテ独白ス
神殿震動ス奉幣使及随員神官等壇ヲ登ル、「才前ハ何
カ、奉幣使ニ先テ参殿スルトハ何ダ、下ガレ」

青年退出

第三場

社前ノ公園広場、松ノ植込等、歩兵戒嚴ス、遙ニ銃声

憲兵等銃ヲ擬シテ群集ヲ去ラシメル、群集次第ニ列ヲ
ナシ「……スルハ軍隊カ」等歌ヒテ去ル

第四場

社前玉垣内、紋付背広フロック等ノ高官、資産家等肅
トシテ列座ス。「モウ軍隊ニスツカリヤラレタラシイ」
等云フ。（以下略）

「六名長髪等ノ青年」は、捉えられた革命の志士だろうか。「労働服ト寶石トヲ着ケタル青年」は、民衆の指導者だろう。「モウ軍隊ニスツカリヤラレタラシイ」とあるのは、群集は決起したが、軍隊に追われたのであろうか。あるいは、資本家に味方する勢力が軍隊にやられたのであろうか。

この後、白タスキの青年が刀を手に現れて活劇があつたりするのだが、なにぶんメモであり、削除された箇所も多いので、粗筋をはっきり押さえることは難しい。しかし、ここにはたしかに労働者・民衆の蜂起による資本家に対する革命のイメージがある。

もちろん、戯曲に革命を描いたから、賢治が現実の革命を支持していたということにはならないかもしれない。しかし、賢治の心が革命に傾斜していたことの一つの証拠にはなるだろう。もしそうだとすれば、それは、窮乏する農

村の現実と、合法的な政治活動さえままならぬ徹底的な思想弾圧の結果だったろう。もはや、改良主義的な考え方は社会の改革は難しいと感じ始めていたのかも知れない。

なお、この頃の戯曲メモに賢治自身の体験によるものと思われる「訊問」という一幕ものがある。これは「東北の或る温泉遊園地の巡查派出所内」（もちろん、花巻温泉遊園地のこと）で「詩人」が刑事から訊問を受けるというものだが、珍しく「時一九二八年六月」という指定が付いている。昭和三年六月の賢治は、八日に花巻を発ち、知人である大島の伊藤兄妹を訪ねて、園芸学校開設の相談にのり、二十四日帰ってきている。もし、六月という時期の指定を現実のものとするなら、訊問にあつてから上京するのは不自然だから、花巻に帰つてからの訊問であろう。羅須地人協会同様、園芸学校も危険視されたということであろうか。治安維持法の改革（改悪）がこの六月成立している。

おわりに

以上、当時の社会主義運動のありようを検証しながら、賢治の思想をその中に位置づけ、浮き彫りにするべく作業を進めてきた。こうした作業の中で明らかになったのは、賢治の思想が当時の社会状況にきわめて即したものであつて、羅須地人協会は、農民運動、社会主義運動の一環とし

て位置づけられるということである。と同時に賢治の思想は、労働農民党が分裂して変化していったように、必ずしも一貫したものではなかったようである。大正一五年の羅須地人協会設立当時の賢治の思想が、初期労働農民党にごく近かつたこと、労働農民党の性格が変化してからも、賢治がシンパであり続けていたことを考えると、羅須地人協会設立当時の賢治の思想と協会がその活動を停止せざるを得なくなつた昭和三年頃の賢治の思想とは、微妙な違いあつたと考えるべきだろう。

なお、『農民芸術概論綱要』と社会主義との関係については、別の機会に譲りたい。

(1) 名須川益男「賢治と労働党」(『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、昭和五〇年四月)。「宮沢賢治について」(『岩手近代百年史』昭和四二年)をもとにしたもの。

(2) 青江舜三郎「宮沢賢治 修羅に生きる」(講談社、昭和四九年)。

(3) 杉浦静「宮沢賢治と労働党」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、平成一三年二月)

(4) 多田幸正「宮沢賢治とウイリアム・モリス——「芸術」と「労働」の関連について——」(『日本文学』昭和五六年一月)

(5) 『日本近代史辞典』(京都大学文学部国史研究室編、東洋経済新報社、昭四八年)「労働派」の項参照。

- (6) 『社会科学総合辞典』(社会科学辞典編集委員会、新日本出版社、一九九二年)「日本労働党」の項参照。
- (7) 遠山繁樹・今井清一・藤原彰『昭和史(新版)』(岩波新書、昭和三四年)を参考に記述した。
- (8) 『社会科学大事典』社会思想社編、改造社、昭和五年)「農民労働党」の項参照。
- (9) (8)の「労働農民党」の項参照。
- (10) (9)に同じ。
- (11) 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』(法政大学出版社、一九七九年)によれば、創立時の日本農民組合の構成員の多くは、賀川、杉山の信仰の友であったという。
- (12) (11)に同じ。
- (13) 『東京朝日新聞』大正一五年八月二二日)
- (14) 藤田富士男・大和田茂『評伝 平沢計七』(恒文社、一九九六年)

(付記) 本稿は、佛敎大学平成一二年度特別研究助成(個人特定研究)による成果の一部である。

